

chapter.07

チベット語大蔵経データベースの利用 および本邦に伝存する漢語大蔵経と その調査の重要性と可能性

宮崎展昌

1. はじめに——チベット語大蔵経および漢語大蔵経の来歴の概略

筆者は修士課程に進学して以来、大乘經典と呼ばれる仏教文献について文献学的な研究を行ってきた。大乘經典の大半は、インドを中心とする南アジアあるいは中央アジアで編纂されたもので、もとはサンスクリット語あるいはプラークリット語などと呼ばれるインドの言語あるいは西域とよばれた中央アジアの言語で記された典籍と考えられるが、それらのかたちで残るものはごく一部に限られる。それら大乘經典を豊富に伝えるのは、本稿で主に扱う、チベット語大蔵経および漢語大蔵経であり、これらの2種の大蔵経はいずれも東アジアで伝承されてきた仏典叢書である。導入にあたる本節では、両大蔵経の来歴などについて簡単に説明したのち、本稿の概要について示したい。

仏典の全書叢書を意味する「大蔵経」ということは、概念が形成されたのは、中国においてであり、インドに由来を持つ言葉ではない。インドでは、紀元前後頃までの比較的早い時期に編纂されたとみられる、経（ブツダの説いた教えを中心にまとめたもの）・律（出家者の生活や集団運営の規則などをまとめたもの）・論（理論書・注釈書）をまとめて「三蔵」と呼ぶが、伝統的な諸部派で伝承されたであろう「三蔵」の範囲はかなり限定的であり、中国やチベットで編纂された「大蔵経」とは完全には対応しない。

中国における「大蔵経」編纂の淵源を求めるとすれば、4世紀に活躍した釈

道安^{どうあん}（314-385）による、漢訳經典の収集とそれに基づく目録の編纂に求められるだろうか。道安は、戦乱の打ちつづく五胡十六国時代において、遠くインドよりもたらされ、漢語に翻訳された貴重な仏典が散逸することをおそれ、自らそれらの収集にあたりるとともに、弟子たちを各地に派遣するなどして漢訳仏典の収集を試み、その目録を残した。その頃は「大蔵経」ということばはまだ用いられておらず、収集された仏典群は「衆経^{しゆきょう}」などと呼ばれていたようである。やがて、南北朝の頃には「一切経」ということばが用いられるようになり、唐代の頃からは、それらの同義語として「大蔵経」ということばが用いられるようになったとみられる¹。

8世紀前半の唐代に編纂された『開元釈経録^{かいげんしゃつきょうろく}』という経録、一切経目録で示された「1076部5048巻」という数字は、長らく大蔵経の標準的な部数・巻数とされてきた。その大蔵経を構成するのは、主にインドに由来する漢訳仏典および僧侶らの伝記類、史書、仏典目録類であった。漢訳仏典には、部派が伝持した経・律・論の三蔵に加え、それらをはるかに上回る分量を誇る大乘の經典と論書（理論書）、および仏伝（ブツダの伝記）や本生譚^{ほんじょうたん}、譬喩経^{ひゆきょう}（ともに前世の物語を扱う。前者がブツダのものであり、後者はブツダに限らず、ほかの人物や動物などをも含む前世の物語）なども含まれる。

宋代のはじめ、10世紀末から11世紀初頭に、勅令により開宝蔵が開板されたことで、それまでは写本の形で伝承されてきた大蔵経がセットのかたちではじめて印刷され、版本大蔵経の歴史が幕を開けた。さらに、11世紀末ごろから、主に江南の地において、大蔵経が民間で雕造・印行されるようになったことで、中国では版本大蔵経が本格的に普及するようになったと考えられている。以降、清代に至るまで、中国では官民の双方で、大蔵経が制作・印行・維持されてきた。また、中国のみならず、華北を領有した遼（契丹）や金、および朝鮮半島でも版本大蔵経は制作された。

大陸や朝鮮半島で制作・印行された版本大蔵経諸本は、鎌倉時代以降、日本にももたらされ、日本では奈良朝以来の伝統を持つ写本一切経とともに伝承されるようになった。近世に入って、17世紀後半の江戸時代初期には、それまでに大陸でも制作されたことがなかった史上初の木版活字による大蔵経の天海版（寛永寺版とも呼ぶ）が開板され、日本国内ではじめて版本大蔵経が刊行さ

れた。それに続いて、明代の万暦年間に制作されたかこうぞろ嘉興蔵の正蔵部（インド撰述典籍と史伝・僧伝などからなる部分）に基づく、鉄眼版（てつげん黄檗版とも呼ばれる）が開板されたことで、日本国内では版本大蔵経が広く普及し、大蔵経に関する批判的な研究もなされるようになった。

近代に入って、西洋から近代的な金属活字を用いた活版印刷の技術が導入されると、日本では、ほかの東アジア諸国に先駆けて金属活字による漢語大蔵経の刊行がはじまった。20世紀前半、大正期から昭和はじめにかけて刊行された「大正新脩大蔵経」（以下、「大正蔵」と略称）は、現在に至るまで、長らく漢語仏典研究の際の標準的なテキストとされてきた。

一方、チベット語大蔵経については、13世紀にインドではイスラム教徒によって主要な仏教寺院が破壊され、仏教がインドの歴史の表舞台から姿を消すと、チベットでも、インドから伝わった仏典が新たに訳出されることもなくなったことで、9世紀頃から翻訳されてきたインド由来の仏教文献を整理し、全書的叢書としてまとめるようとする動きが出てきたとみられる。そうした動きを受け、14世紀頃には「仏説部（カンギュル）」（ブッダが説いたとされる典籍群。主に経と律からなる）と「論疏部（テンギュル）」（ブッダ以降の仏教者が説いたり著したりした典籍群。理論書や注釈書、儀礼・儀軌のマニュアル類など）という、独自の分類による翻訳仏典叢書が編纂されたと伝わる。

本稿のタイトルなどでも用いている「チベット語大蔵経」ということばは、上記の「仏説部」と「論疏部」を総称するものであるが、チベットでは伝統的に「大蔵経」という呼称は用いられず、中国で成立したことば・概念を借用した便宜的な呼称である。チベットでは「仏説部」と「論疏部」はそれぞれ別々に伝承されてきたようである。本稿では主に「仏説部（カンギュル）」について扱うが、それらは書写することによる功德が甚大とされてきたので、現在に至るまで、多種多様の写本形態の「仏説部」が伝存するのに対して、「論疏部」は写本や版本のかたちで伝存するものは限られる。

以下、第2節では、上述のように多種多様なものが伝存する、チベット語大蔵経の「仏説部（カンギュル）」の写本および版本資料の多くが、現在はインターネット上に構築されたデータベースで入手・参照できるさまを紹介する。すなわち、「仏説部」の諸資料を参照する上で便利なオンライン・データベース2

種の紹介を兼ねながら、現存するカンギュル資料について概観する。

第3節では、これまでに影印版やデジタル画像のかたちで公表されている漢語大蔵経資料、および日本の寺院などで保存されてきている貴重な漢語大蔵経の写本および版本資料について概略を紹介する。さらに、個別の漢訳經典について、資料の収集と調査を行ってきた筆者の経験に照らして、大蔵経資料の画像などを用いて直接調査することの重要性およびそれに伴う可能性について、具体的な事例をもとに報告したい。

2. チベット語大蔵経の「仏説部」(カンギュル)のデータベースとそれらによって参照可能な諸本資料

14世紀頃に成立したとされる「古ナルタン」とも呼ばれる「仏説部 (カンギュル)」および「論疏部 (テンギュル)」は、ともに写本形態で編纂されたものとされる。15世紀、明・永楽帝の治世に、「仏説部 (カンギュル)」の版本が中国ではじめて彫造、印行された。この前後からカンギュルの伝承は、大きく、版本形態のものと写本形態のものに分かれたと考えられる。

従来は、版本を中心とするツェルパ系と、写本を中心とするテンパンマ系の2種の系統が、カンギュルの伝承系統の「二大系統」とされ、それらが混合したカンギュルやいずれにも属さない独立系の写本カンギュルなどが知られてきた。

さらに、後で紹介するウィーン大学のプロジェクトによって、現在はインド領に含まれるチベット文化圏を中心に、写本カンギュルの搜索と調査、撮影が精力的に行われたことで、新たな資料が見出され、参照可能になってきた。特に、インド・ヒマチャール州のタボ寺に保存されてきた写本群の資料は、同寺が創建された10世紀末ごろから集積されたものと見られる。それらはカンギュルやテンギュルとして整理・組織されるよりも以前の、チベット語訳仏典の伝承のあり様を伝える可能性がある、として注目されている。また、近年、ムスタン系と呼ばれる写本カンギュル数種がラダックで見出されたり、チベット文化の影響を受けてきたブータン国内で伝承されてきたブータン系とされる写本カンギュル数種の高精細な画像がインターネット上で公開されたりして、近年、カンギュルをめぐる資料状況は目まぐるしく変化してきている。

このように、チベット語大蔵経の参照可能な資料をめぐる研究環境に大きな変化をもたらしている要因の一つは、インターネット上での画像データベースが整備されたことであろう。本稿では、その代表的なもの2点を紹介したい。

1点目は、1999年に米国の仏教学者 Gene Smith が中心となって立ち上げられた、Tibetan Buddhist Resource Center (TBRC; <https://www.tbrc.org/>) である。それまでは紙媒体の影印版、あるいはマイクロフィルムやマイクロフィッシュのようなかたちで頒布・刊行されてきた、チベット語大蔵経を含む、チベット仏教関係の文献資料を、当初はCD-ROMあるいはDVD-ROMに収録されたPDFのかたちで頒布していた。やがて、インターネットの発展・普及に伴って、インターネット上で利用可能なチベット仏教文献資料のデータベースを構築し、PDFデータの公開・提供をはじめた。従来、カンギュルとテンギュルあわせて、大判の書籍200冊程度あるいはそれ以上の分量にもなるチベット語大蔵経が、CD-ROMやDVD-ROMで入手、参照できるようになっただけでも、当時筆者は随分びっくりした記憶があるが、いまや、インターネット環境さえあれば、膨大なチベット仏教文献資料がスマートフォンやタブレットなどでも閲覧できる状態にある（現在はスマホおよびタブレット用のアプリも開発・公開されている）。2016年には、TBRCはBuddhist Digital Resource Center (BDRC; URLは上記のまま)と改称し、チベット仏教文献に限らないかたちでのデータベースの拡張と充実を目指しているようである【図1】。

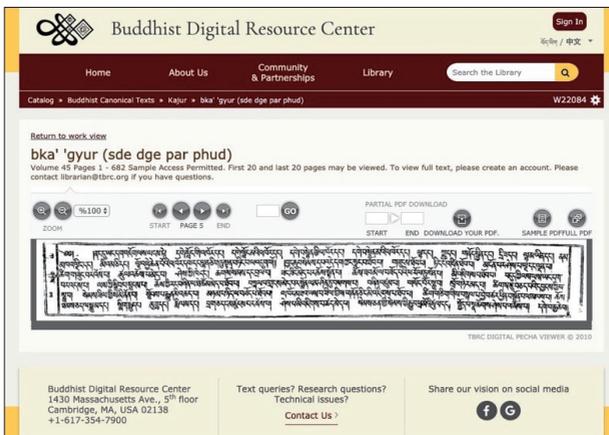


図1 「Buddhist Digital Resource Center (BDRC)」でデルゲ版カンギュルを表示している様子

もう一つ、チベット語大蔵経研究で大きな役割を果たしてきたのが、ウィーン大学の Tibetan Manuscripts Project Vienna (TMPV) が構築・維持している、Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs; <https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php>) である【図2】。

その名称の上では、カンギュル・テンギュルの双方をカバーしているが、その主体はカンギュル諸本の資料である。特に上記プロジェクトが自ら実地調査を実施し、現地でも撮影してきた写本カンギュル資料が極めて重要である。そのような個別のカンギュル写本資料を紙媒体やマイクロ資料のかたちで頒布、刊行することは従来容易ではなかったが、デジタルカメラによる撮影およびインターネットを介してのデジタル画像の公開が可能になったことで、そうした資料の公表は従来よりも格段に容易になった。それにより、rKTs では、これまではアクセスすることさえ難しかった貴重なカンギュル資料が公開され、それらを研究者が用いることが可能になった。そのほか、rKTs 自身で作成・準備したものではない、写本・版本のカンギュル諸本資料についても、BDRCなどで公開されているものを借用するかたちで rKTs 内でも参照できるようにされている（中には、BDRC では一般からのアクセスが制限されている資料の一部が、rKTs を経由することで閲覧できるケースも見られる）。

上記2種のデータベースサイトをあわせれば、相当数のチベット大蔵経資料の画像をインターネット上で収集・参照することができる。これら二つのサイ



図2 「Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs)」のトップページ

トは、いまやチベット語大蔵経、特にカンギュル資料を扱う上で必要不可欠なツールと言える。

以下では、上記両データベースサイトでの閲覧の可否やほかのツールでの参照方法を含め、現存するカンギュル諸本のうち、主要なものに関して、上記のように下線を施した系統・分類に基づいて紹介する。

» ① ツェルパ系

(a) 大谷大学所蔵北京版（カンギュルは1717-1720年、テンギュルは1724年開板）

清代に北京で雕造された、チベット語大蔵経の版本諸種は「北京版」と呼び習わされている。中でも、寺本婉雅^{えんが}（1872-1940）が将来した大谷大学所蔵本は、チベット語大蔵経諸本の中でもいち早く影印版が刊行され（鈴木学術財団、1955-1961）、これまで長らくチベット語大蔵経の代表的な版本資料として用いられてきた。現在ではインドで保管されている北京版がBDRCで公開され、ウランバートルに保管されている北京版がDVDのかたちで頒布されている（当初は日本のDigital Preservation Society（DPS）より頒布。現在はチベット書籍専門店のカワチェンが頒布）。ただし、これまでの研究の蓄積を鑑みれば、大谷大学所蔵の北京版チベット語大蔵経の全体がWeb上で公開されることが切に俟たれる。なお、テンギュルのごく一部については、所蔵者の大谷大学で公開されている（URL: <http://web.otani.ac.jp/tpdb/web/index.html>）。

(b) ジャンサタン（リタン）版（1608-1621年開板）

北京版とは系統を異にする、ツェルパ系のカンギュル版本として最も古いものとして知られる、重要なものである。長らくベルリン国立図書館からマイクロフィルムの複製を譲ってもらったが、成田山仏教研究所で閲覧するかのいずれかでしか参照できなかったが、現在はrKTsを経由するかたちで、BDRC作成のPDFデータを閲覧・参照できる。

ちなみに、ジャンサタン版の覆刻版として、**チョネー版**（1721-1731年に開板）が知られる。同版は、国内では東洋文庫や大谷大学などに所蔵されている。また、米国議会図書館蔵本を複製した、チョネー版のマイク

ロフィッシュが頒布されていたことで従来より比較的参照しやすい資料であったが、現在は BDRC でも PDF データが閲覧できる。

» ②テンパンマ系

(c) ロンドン写本（18 世紀頃の書写）

ロンドンの大英博物館に所蔵される写本カンギュルであり、ヒマラヤ山麓に近い、シェルカルゾンで書写されたとされる。そのマイクロフィッシュが頒布されてきたことで、比較的参照することが容易であったが、現在、rKTs ではそれをデジタル化したものが公開されている。

同じく、シェルカルゾンで 18 世紀前半に書写されたとみられる、ラダックのシェイ宮殿で所蔵されているシェイ写本カンギュルが BDRC において公開されている。

(d) トクパレス写本（18 世紀前半の書写）

ラダックのトク宮殿に伝存する写本カンギュルであるが、ブータンに伝わったテンパンマ系カンギュル写本の流れを受けるとされる。1980 年にインドから刊行された影印本に基づくマイクロフィッシュが頒布されてきた。現在は、その PDF データが BDRC で公開されている。

(e) ウランバートル写本（17 世紀の書写か？）

モンゴルのウランバートル国立図書館に保存されている写本カンギュルである。17 世紀にダライ・ラマ 5 世（1617-1682）によって下賜されたものとされ、テンパンマ系写本カンギュルの中でも最も正統なものである可能性が指摘されている。比較的古くからその伝存が確かめられていたものの、2007 年になって、日本の Digital Preservation Society（DPS）より、デジタル撮影されたものがようやく公表・頒布され、研究者らがそれらを参照することが格段に容易になった。

(f) 東京写本（19 世紀の書写）

河口慧海^{えいかい}が 1915 年にダライ・ラマ 13 世より下賜された写本カンギュルであり、現在は東京の東洋文庫に保管されている。同写本カンギュルは、19 世紀にギャンツェで書写されたものであり、書写年代は比較的新しいものの、来歴などが確かなもので、チベット文化圏外に伝来する数少ない

写本大蔵経セットの一つであり、貴重なものである。

長らく、東洋文庫において閲覧するか、そこで撮影を依頼して複製を作成してもらうことでしか研究者は参照できなかったが、2019年にはデジタル撮影およびその公開の準備がはじまり、その公開開始が俟たれる。

» ③ ツェルパ系とテンパンマ系の混合

従来「二大系統」として知られてきた、ツェルパ系とテンパンマ系の2系統が混合したものが知られる。ただし、そのレベルには相違があり、本文のレベルで混合したもの、すなわち、二つの系統のカンギュルを校合して新たな版本カンギュルの本文を編集したもの、および、典籍ごとにいずれかの系統に分かれるものの、2種類がある。前者を代表するのがデルゲ版カンギュルとその覆刻とされる版本カンギュルであり、後者を代表するのがナルタン版カンギュルである。

(g) デルゲ版 (1733年に完成)

版本カンギュルの系統であるツェルパ系本に基づきながら、テンパンマ系の流れを汲むとされるロゾン・カンギュルを用いて校合作業がなされて編集されたのがデルゲ版カンギュルである。現在もチベット・カム地方のデルゲ印経院において版木が保管、維持されており、それらを用いた印行も継続されている。日本には東北大学や高野山大学での所蔵が知られ、海外でも複数の機関で所蔵されている。20世紀後半には台北より影印版が刊行されたり、1998年には高野山所蔵本をデジタル撮影したものがCD-ROMのかたちで発行されてきたが、現在はデルゲ版カンギュル数種のPDFデータがBDRCで公開されている。

その校訂や雕造の質の高さから良本とされるデルゲ版を覆刻した版本カンギュルも複数作成された。アムドで開板されたラギャ版カンギュル(1814-1820年開板)、モンゴルで開板されたウルガ版カンギュル(20世紀初頭)などが知られる。いずれもBDRCで閲覧できる。

(h) ナルタン版 (1732年に完成)

ナルタン版カンギュルは、ダライ・ラマ6世の命によって開板されたとされるが、1706年にダライ・ラマ6世が遷化したためにその作業が中断

したりして、制作には比較的長い年月を要したようである。ダライ・ラマ 6 世遷化の影響からか、ナルタン版では典籍ごとにテンパンマ系の流れを汲んだものとツェルパ系の流れを汲んだものが見られ、いずれの系統に属するかは典籍ごとに調査をする必要がある。比較的早い時期に、インドより影印版が刊行されていたが、現在は BDRC で PDF データが閲覧できる。

20 世紀初頭にダライ・ラマ 13 世の命によって、ラサにて開板されたラサ版カンギュルはナルタン本を底本としながら、デルゲ版を校合して作成され、1934 年に完成した。日本では東京大学などに所蔵され、現在は BDRC で PDF データが公開されている。

» ④ムスタン（ラダック）系

Eimer 氏などの研究²²によって、上述の二大系統に分かれることが 20 世紀後半にかけて明らかにされたが、21 世紀に入って、ウィーン大学のチベット語写本プロジェクト（TMPV）が精力的に現地調査を実施してきた結果、ラダックに伝存されていた写本カンギュルの中に、ネパールのムスタンに伝わっていたカンギュル目録とその構成が類似するものが見出された。これらを、従来の二大系統と異なるものとして、rKTs に倣い、ここでは「ムスタン系」あるいは「ラダック系」と呼ぶ。現時点では下記の 2 種類の存在が知られているが、上記二大系統および後にみる独立系諸本との具体的な相互関係については現時点では明らかにはなっていない。

(i) バスゴ（Basgo）写本

(j) ヘーミス（Hemis）写本（2 種）

上記のいずれも rKTs において画像が公開されている。

» ⑤ブータン系写本カンギュル

伝統的にチベット仏教の影響を大きく受けてきたブータンにおいて伝承されてきた写本カンギュルについては、現在、ウィーン大プロジェクトなどの調査によって、15 種類以上の現存が知られる。現在、大英図書館（British Library）の協力を得るかたちで、そのうちの 8 種の高精細な画像が同図書館のサイトで公開されている（<https://eap.bl.uk/project/EAP570>）。

rKTs によれば、それら 8 種は二大系統のツェルパ系とテンパンマ系のいずれか、あるいは両系統が混合したものに分類できるようである。一方、Shayne Clark 氏の最新の研究によれば、文献によってはブータン系諸本のいくつかで、ほかの諸本とは別の系統を形成していると思わせる場合があるようである³⁾。ブータン系写本カンギル諸本については、今後、研究が進展することで新たな知見が得られることが期待される。

» ⑥独立系諸本

上述のいずれの系統にも属さない写本カンギルあるいはカンギルに類する写本資料の存在が知られている。大別して、カンギルとして編纂されたとみられるものとカンギル編纂以前の姿を伝えるものがある。

まず、前者のカンギルとして編纂されたものには、次の 2 種が知られる。

(k) プクタク写本

西チベットのプクタクに保存されてきたカンギルであるが、特定の典籍には複数種類の翻訳を伝えていることが知られ、カンギル研究においては重要な資料である。比較的早くからマイクロフッシュが頒布されていたが、現在では、rKTs でそれらをデジタル化した画像が公開されている。

(l) バタン（ニューアーク）写本（ただし、カンギルの完本ではない）

アメリカ合衆国・ニュージャージー州のニューアーク博物館で保管されている写本カンギルであるが、カンギル写本は通常百帙程度を数えるが、バタン写本は 24 帙しか伝存せず、カンギルのセット全体を伝えるものではない。ただし、典籍によってはほかのカンギルに伝える翻訳とはまったく異なるものを含むことが知られ、そうした異本資料はきわめて貴重である。インターライブラリーローン（ILL）サービスを利用することで、大学図書館を経由してニューアーク博物館よりマイクロフィルムの複製を譲ってもらうことは可能だが、デジタル画像を入手することは現時点では難しい。

次に、カンギルが編纂されるより前、あるいはカンギルが編纂されてからまもない頃の姿を伝えるカンギルに関する資料が知られる。具体的には、

次の2種類の写本資料である。

(m) タボ寺写本

ラダックのスピティ渓谷に位置し、精細な密教図像が残されていることで有名なタボ寺に伝わる、チベット語仏典の写本資料である。同寺が創建された10世紀末ごろから集積されてきたものとみられ、カンギュル資料のみならず、テンギュルに分類される資料も含む。整理されてきたものではないためか、大半の典籍が断片的なものであるが、書写年代が相当に古いものや複数種類の翻訳を伝えるものもあって、カンギュル研究のみならず、チベットにおける仏典の初期の伝承を探る上でも貴重な資料である。rKTsにおいてTMPVによって撮影された画像が公開されている。

(n) ゴードラ写本

14世紀から15世紀頃に書写されたとみられるものを集成したものであり、現存のカンギュル諸本とは異なる独自の方法で整理されている。カンギュルの原初的な様子を伝える可能性が考えられ、rKTsでは“proto-Kangyur”と呼ぶ。タボ寺写本同様、カンギュル研究においては貴重な資料である。同じく、rKTsにおいてTMPVによって撮影された画像が公開されている。

以上みてきたように、上記の主要なカンギュル資料のほとんどがBDRCもしくはrKTsにおいて参照することができる。さらにrKTsでは新たなカンギュル写本資料数種の公開も準備しているようであり、今後もインターネット上で利用可能なカンギュル資料は増えていくものと予想される。ただし、ここまで参照可能な資料が増えてしまうと、それらをすべて用いての校合・校訂作業というのは決して容易ではない。典籍の長さにもよるが、1巻(bam-po)を超えるようなものは、特定の箇所を用いてサンプリングを行うことである程度系統の目処をつけたり、写本資料についてはその質などについて確認することで、どの資料を典籍全体の校合・校訂に用いるかをあらかじめ判断する必要があるだろう⁴。

いずれにしても、筆者がカンギュル資料を扱いはじめた十数年ほど前は、印

刷された影印版やマイクロ資料が主流であったのに対して、カンギュル資料の収集に関しては時間を大幅に短縮できるようになっている。また、チベット文化圏の寺院や特定の研究機関に保管されている、貴重なカンギュル写本資料などをインターネットを介して参照できるメリットは計り知れないほど大きい。

3. 日本に伝存する写本および版本大蔵経

— それらを実際に調査することの重要性と可能性

大正期から昭和のはじめに刊行された「大正新脩大蔵経（大正蔵）」は、その刊行以来、漢語大蔵経の学術的な調査・研究を行う際の標準的なテキストとされてきた。さらに、近年、SAT および CBETA によって、大正蔵全体にわたるテキストデータベースが整備されて、それらを研究に活用することも可能になったことで、仏教学に限らず、仏教文献を扱う学術分野における大正蔵の重要性はますます高まっている【図3】。

一方、大正蔵の刊行前後より現在に至るまで、さまざまな大蔵経諸本資料にアクセスすることが可能になってきている。具体的には、中国で再発見された版本大蔵経数種の影印版が発行されたり、日本各地の寺院や機関などで保存されてきた写本および版本大蔵経の画像が公表されたりしてきた。これらを用い



図3 「SAT 大正新脩大蔵経テキストデータベース 2018 版 (SAT 2018)」閲覧ページ

ることで、従来標準とされてきた大正蔵について批判的に研究することが可能になってきている。

ここでは、まず一般に参照可能な影印版やデジタル画像が公表されている大蔵経資料 13 点について紹介する（大正蔵編纂の際に用いられたものは網かけを施す。現在インターネット上でも参照可能なものはアステリクを施す）。

- (A) **聖語蔵経卷**（しょうごそう）：東大寺の塔頭、尊勝院に伝持されてきた仏典経卷群。8 世紀の奈良時代・天平期に、官営の写経所で書写された一切経である「五月一日経」ごがつついたちきようなどの約 1500 巻を中心に、隋・唐期の中国で書写された経卷、平安・鎌倉期以降に日本で書写されたもの、興福寺で彫造・印行された春日版などからなる。大正蔵編纂の際に対校本として用いられ、脚注にはその異読が示されている。丸善雄松堂より CD-ROM あるいは DVD におさめられたデジタル画像のかたちで頒布されてきたことで、研究者が調査することが比較的容易になった。
- (B) **開宝蔵**（宋勅版、蜀版）：10 世紀末の宋において開板された、史上はじめての版本大蔵経。世界に現存する零巻十数巻を精細に複製したものが『開宝遺珍』として刊行された。
- (C) **高麗大蔵経初雕本**：朝鮮半島に侵攻を繰り返す契丹（遼）の退散を願って、宋より下賜された開宝蔵に基づいて、11 世紀はじめより高麗で開板された大蔵経。京都・南禅寺に保存されていた約 1700 巻を中心に、朝鮮半島などで保存されていたものを合わせて、当初は高麗大蔵経研究所の Web ページで画像が公開されていた。2012 年には、中国から「高麗大蔵経初刻本輯刊」というかたちで影印版が出版された。
- (D) **房山石経**（ぼうざんせつげい）：北京郊外の房山雲居寺うんごじにおいて伝存する、隋代から明代にかけて制作された膨大な石刻経。中でも、遼・金代に制作されたものは、失われた契丹蔵を複製したものと考えられている。それ以外の時代の石刻経も当時の経文を伝えるので貴重である。中国仏教会より影印版のかたちで刊行されている。
- (E) * **福州版**（東禅寺版および開元寺版）：11 世紀末ごろから福州の東禅寺かいげんじと開元寺で相次いで開板された大蔵経。それらは別々の大蔵経であるが、

麗にて再度雕造されたもの。大半は初雕本に基づきながらも、契丹蔵や江南諸蔵、写本などを用いて改訂したとされる。大正蔵は増上寺蔵の高麗蔵再雕本を底本とし、本文はその再現を目指したものである。韓国・東国^{とんどく}大学校より洋装本の影印版が刊行され（1957～78年）、近年は高麗大蔵経研究所の Web ページで画像が公開されていた（現在は公開が中断してしまっているようである）。

- (I) **磧砂蔵**：南宋代の 13 世紀はじめ頃から元代の 14 世紀頃にかけて、長期間にわたって雕造された。南宋滅亡時には一時中断したものの、それ以前のもの思溪蔵、元代のもの普寧寺蔵^{ふねいじ}に基づくとみられる。1931 年に西安の臥龍寺^{がりゅうじ}と開元寺で発見され、まもなく、上海より影印版が刊行された。日本では、杏雨書屋蔵本（もとは大蔵出版所蔵本）のほとんどが磧砂蔵本として知られるほかは、他本との混合したかたちでしか伝わらない。
- (J) **洪武南蔵**：14 世紀後半、明・洪武帝の命によって開板され、15 世紀はじめに完成した勅版大蔵経。その全蔵を伝える版本は長らく現存が確かめられていなかったが、1934 年に四川にて発見された四川省図書館蔵本に基づく影印版が、20 世紀後半に刊行されている。
- (K) * **永楽北蔵**：明・永楽帝が北京に遷都したのちに開板された勅版大蔵経。15 世紀半ばに完成。宮廷内に保管され、印行も制限されていたために、日本にはほとんど伝存しない。故宮図書館蔵本に基づく影印版が刊行されており、その PDF 版が台湾大学図書館の Web ページで公開されている。URL: <http://buddhism.lib.ntu.edu.tw/sutra/chinese/index.jsp#B>
- (L) * **嘉興蔵（万曆版大蔵経、徑山蔵）**：永楽北蔵を底本として南蔵などを校合して、正蔵部分は 16 世紀後半から 17 世紀前半にかけて、続蔵・又続蔵は 17 世紀後半にかけて民間で制作された。史上初の方冊体の大蔵経。江戸時代には 50 蔵以上が日本にもたらされたと考えられる⁵。日本で開板された鉄眼版（黄漿版）は基本的には嘉興蔵の正蔵部分に基づく。大正蔵では増上寺報恩蔵（現在は西蓮社所蔵^{ゆうれんじや}）の嘉興蔵が対校本として用いられる。現在、東京大学総合図書館所蔵の嘉興蔵が Web 上で公開されている。URL: <https://dzkimgs.l.u-tokyo.ac.jp/kkz/> 【図 5】
- (M) * **龍蔵（乾隆大蔵経）**：18 世紀の清・雍正帝のときに北京で開板され

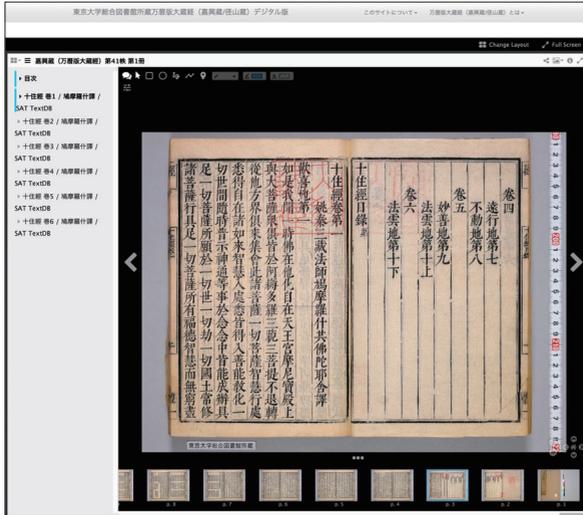


図5 「万曆版大藏經（嘉興藏／徑山藏）デジタル版」で版面画像を閲覧している様子

た勅版大藏經。永楽北藏同様、版木は宮廷内に保管され、印行も制限されていたためか、日本にはほとんど伝わっていない。その版木は現在房山雲居寺に現存する。影印版が刊行され、台湾大学図書館の Web ページでその PDF 版が公開されている。URL: <http://buddhism.lib.ntu.edu.tw/sutra/chinese/dragon/html/index.htm>

以上のように、大正蔵刊行当時はアクセスが難しかった資料についても、20 世紀後半以降、大藏經諸本資料が新たに公表されたことで、漢語大藏經を取り巻く研究環境は大きく変化してきている。また、上述のように、大正蔵の本文自体は、底本とした高麗藏再雕本の本文の再現を目指したものであり、本文批判（テキストクリティーク、原典批判）を経たものでないことは十分に留意する必要がある。特に、個別の漢語仏典について探求を深めるような場合、上記の資料も用いながら本文批判を試みる必要があるだろう。

さらに、本邦には、貴重な写本一切經や版本大藏經が何セットも現存し、それらを調査していくことで、大藏經研究をより一層深め、充実させることができる可能性がある。特に、院政期から鎌倉前期にかけての中世初期に書写され

た写本一切経数点については、国際仏教大学院大学の落合俊典先生が率いる日本古写経研究所によって、寺院に保管されている経巻をデジタル撮影し、それを公表することが試みられている。また、いくつかの寺院では所蔵する大蔵経の調査を許可しているところもある。そうした所蔵寺院や機関の理解と協力によって、近年、漢語大蔵経研究はさらに新たな局面を迎えているように筆者は感じている。

以下では、日本に所蔵されている写本一切経および版本大蔵経について概観する。ただし、版本大蔵経については、中国にはほとんど伝存しない、宋・元代の頃までのものを中心とする。

まず、12世紀の院政期から13世紀の鎌倉前期にかけて書写された写本一切経については、以下のようなものの現存が知られる。(ここでは版本大蔵経を底本とするものは省略する。後にみる個別典籍の調査に際して筆者が入手・調査し得た資料は下線を施す(以下同)。)

- (1) ●高野山金剛峯寺蔵金銀交書一切経(中尊寺経)^{まががき}：藤原清衡発願。およそ4500巻が現存。
- (2) ◎神護寺経：鳥羽院が発願、後白河院の頃に完成。約2300巻が現存。
- (3) ◎荒川経(高野山蔵)^{あらかわ}：美福門院発願(夫・鳥羽院の菩提を弔うため)。約3500巻が現存。
(以上の3種は紺紙に金字などで書写された装飾一切経。権門による発願。)
- (4) ◎法隆寺一切経：法隆寺には994巻が伝存。巷間にも相当数が伝わる。
- (5) ◎石山寺一切経：院政期以前のものも620巻を含む。院政期のものは2915巻が現存。それ以降の写本や版経も含む。
- (6) ◎七寺一切経^{ななつでら}：12世紀後半に書写。4954巻が現存。
- (7) ◎興聖寺一切経^{こうしょうじ}：12世紀後半に丹後で書写された西楽寺一切経が母体。5261巻が現存。
- (8) 大門寺(西方寺)一切経：2181巻が現存。100巻ほどが巷間に流出。
- (9) 金剛寺一切経：最も古い紀年が残る11世紀後半より、100年以上かけて書写された写本一切経。約3130巻が現存。
- (10) 名取新宮寺一切経^{なとりしんぐうじ}：13世紀の鎌倉前期に書写されたものを主体に2565

巻が現存。

- (11) ◎ 妙蓮寺蔵松尾社一切経：秦氏の発願によって院政期の 12 世紀前半に書写されたもの。およそ 3500 巻が現存。20 世紀末に妙蓮寺で再発見された。

これらはいずれも奈良時代の天平期に書写された写本一切経の系譜に連なると考えられているものであり、後に見る版本大蔵経とは系統を異にする。ただし、上記の写本一切経中の一部の経巻には、版本大蔵経の影響を受けたと見られる痕跡が確認できる場合がある。

(1) 「中尊寺経」とも呼ばれる、国宝の金銀交書一切経は、ほかに類例を見ない、豪華な装飾写本一切経の遺例である。現在、高野山靈宝館^{れいぼうかん}に保管されており、その全画像を撮影したポジフィルムが京都国立博物館で管理されている。所定の手続きをとれば、その紙焼き資料を譲り受けることができるので、研究者はそれらに基づいて調査することが可能である。(5) 石山寺一切経については、現在、石山寺総合調査団による調査が進められているが、調査団が調査を行う、夏と冬の年二回の機会を利用して閲覧・調査することが可能である。

(6) 七寺一切経、(7) 興聖寺一切経、(9) 金剛寺一切経については、国際仏教学大学院大学の日本古写経研究所によって調査・撮影が進められている。(9) 金剛寺一切経に関しては、すでに全巻の撮影および画像の公開が完了しているが、(6) 七寺一切経については現在、資料の調査および撮影、画像の公開が進められている。(7) 興聖寺一切経については、調査と撮影が現在進められているようであるが、画像の公開はなされていない。また、(8) 大門寺一切経のうち、巷間に流出した 100 巻ほどは同研究所で撮影されて、画像が公開されているようである。

ちなみに、日本古写経研究所では、従来刊行された諸寺院蔵の一切経に関する報告書などに基づいて、データベースを構築し、Web 上でも公開している。それを利用すれば、主に院政期以降に書写・整備された写本一切経について、どの典籍の、どの巻が現存するのかについて調べることができる。さらに、それらの典籍の画像については、すでに撮影されて、整理されたものについては、Web 上で公開されるのは巻首のみであるが、国際仏教学大学院大学図書館にて、

すでに撮影・公開されている全画像を閲覧・複写することが可能である。資料を所蔵する寺院の理解と協力を得るために、上記のような限定されたかたちでの画像公開を行っているが、各地の寺院に所蔵される一切経や諸史資料の調査・閲覧は、1年の間でも限られた時期にしかできないことがほとんどであり、制約も大きいことに比べれば、同研究所の取り組みは個人的には実にありがたいものである。

次に、日本で所蔵される版本大蔵経について見ていくが、ここでは舶来の版本大蔵経のうち、宋代の福州版と思溪蔵、および元代の普寧寺蔵について扱う。これらの版本大蔵経は中国で制作されたものながら、その中国ではまとまった分量の現存が確かめられておらず、世界的に見ても、日本に伝存する諸本はかなり貴重である。

まず、(I) 福州版大蔵経であるが、日本に伝存するものはいずれも東禅寺版と開元寺版の混合蔵である。この両蔵は別々に制作された、2種の版本大蔵経であるが、相当に密接な関係にあったとみられる。

(I) 日本に伝存する福州版大蔵経

- (1) ◎東寺：東禅寺版 6087 帖、開元寺版 639 帖。後白河院の皇女である宣陽門院寄進。
- (2) ●醍醐寺：6102 帖（『大般若経』以外のほとんどが東禅寺版）；重源将来本とされる。
- (3) ◎金剛峯寺：3750 帖（東禅寺版が多数）。仁和寺→天野社由来。
- (4) 本源寺（愛知）：東禅寺版 1861 帖、開元寺版 225 帖。三聖寺さんしやうじ→覚勝寺由来。
- (5) 宮内庁書陵部：6263 帖（開元寺版が多数）。法華山寺→石清水八幡宮由来。
- (6) ◎知恩院（開元寺版 4940 帖、東禅寺版 978 帖）：色定法師しきじやうほっし一筆一切経の底本となった宗像社旧蔵本の可能性がある。徳川秀忠による寄進。
- (7) ◎金沢文庫（開元寺版 2116 帖、東禅寺版 978 帖）：称名寺蔵本。

(5) 宮内庁所蔵本はすでに見たように、大正蔵編纂の際に対校本として用いられたものであり、近年、その画像が Web 上で公開された。一方、(2) 醍醐寺蔵本については、『大般若経』以外はほとんどが東禅寺版という、かなり特異な構成になっていることが知られる。同寺所蔵の宋版一切経については、毎年 8 月の調査期間には、申請して許可を得れば、閲覧・調査ができる。

次に、(II) 思溪蔵を主体とする国内所蔵本については、次のような現存が知られる。

(II) 思溪蔵を主体とするもの

- (1) ◎増上寺：5356 帖。もとは近江・菅山寺^{かんざんじ}の蔵本を徳川家康が譲り受け、寄進。
- (2) 最勝王寺（茨城）：5195 帖（福州版含む）。江戸時代初期の天海版（寛永寺版）制作の際の校本に用いられる。
- (3) ◎岩屋寺（愛知）：5157 帖。高山寺由来。
- (4) ◎唐招提寺：4456 帖。海龍王寺旧蔵を含む。
- (5) ◎興福寺：4354 帖（磧砂蔵、祥符寺版含む）
- (6) ◎長滝寺^{ちやうりゅうじ}（岐阜）：3752 帖
- (7) 大谷大学図書館：3374 帖。巖島神社旧蔵。
- (8) ◎喜多院（埼玉）：思溪蔵 2781 帖、普寧寺版 1789 帖。天海版の底本。大内氏由来か。
- (9) ◎長谷寺（奈良）：2220 帖。久米田寺^{くめたじ}旧蔵。

(3) 岩屋寺本に中国国家図書館蔵本を組み合わせたものをもとに、2018 年に思溪蔵の複製本が中国より発行された。ただし、折帖の形態で、精細な複製本のためか、相当に高価であり、現在のところ、国内では、その制作に協力した国際仏教学大学院大学の図書館にのみ所蔵されるようである。同大図書館での閲覧・調査が可能である。(1) 増上寺本は大正蔵においては対校本として用いられた。

(III) 普寧寺蔵については、現在まで影印本も公開されておらず、Web 上でも公開されておらず、調査することがかなり難しい版本大蔵経の一つである。

(Ⅲ) 普寧寺蔵を主体とするもの

- (1) ◎増上寺：(普寧寺蔵) 5417 帖。大内氏領蔵本由来か。
- (2) ◎浅草寺：(普寧寺蔵) 5482 帖 (和版を含む)。鶴岡八幡宮旧蔵。
- (3) ◎東福寺 (京都)：(普寧寺蔵) 4115 帖、(磧砂蔵) 45 帖。
- (4) ◎西大寺：(普寧寺蔵) 3450 帖。叡尊の弟子らが関係か。
- (5) 園城寺：(普寧寺蔵) 2854 帖。大内氏将来本→毛利氏によって寄進か。
- (6) ◎南禅寺：(普寧寺蔵) 2253 帖 (高麗蔵初雕本) 1715 帖 (再雕本) 25 帖。須磨・全昌寺由来。
- (7) 安国寺 (岐阜)：(普寧寺蔵) 2208 帖。
- (8) 般若寺 (奈良)：(普寧寺蔵) 826 帖。

普寧寺蔵は元代に江南地方で制作された版本であり、東福寺蔵本については中国から直接もたらされたものとみられるが⁶、先の喜多院蔵本に含まれる普寧寺蔵本には朝鮮の人々による施財記 (大蔵經の印行に際して施財 (布施) した人物やその目的について記したもの) がみられることから、朝鮮半島經由でもたらされたものもいくらかあったとみられる。

(6) 南禅寺所蔵の混合蔵に含まれる、高麗蔵初雕本は非常に貴重なものであり、それらに基づいた影印版が中国より発行されている。一方、(1) 増上寺本は大正蔵においては対校本として用いられた。

以上見てきたような日本に伝存する版本大蔵經は、中国をはじめとする諸外国には、セットとしては伝わらない貴重なものばかりである。これらのほとんどは、現在のところ、研究者が調査するのは容易ではない。しかし、将来的にこれらを調査することができるようになれば、中国で制作された版本大蔵經諸本についてより詳細な状況、例えば、伝存する諸本の印刷された順序や伝播の在り方、改訂の有無などについても明らかになることが期待される。

これらの貴重な版本大蔵經は数百年以上の長きにわたって、各寺院において多大な労力と細心の注意をもって保存、伝承されてきたものであり、それらをにわかに公開することは難しいことを筆者は十分に理解している。一方で、印刷・刊行すれば膨大な分量になるような大蔵經資料も、近年の情報技術の発達

によって、デジタルのかたちであれば比較的容易に公表することができるようになってきている。今すぐにとすることは難しくとも、長い年月の間、綿々と受け継がれてきた貴重な大蔵経の価値を、現代に最大限に活かすためにも、所蔵者の理解と協力を得ながら、将来的には公表されていくことを個人的には切に希望している。

最後に、筆者がこれまでに調査してきた個別の漢訳経典における事例を通して、版本大蔵経を実際に調査することの重要性とそれがもたらす可能性について簡単に述べておきたい。

ここで扱う個別の漢訳経典とは、3世紀後半、西晋時代に活躍した竺法護^{じくほうご}が訳出したとされる『普超三昧経』^{ふちょうさんまいきょう}である。同経は、江南で開板された版本大蔵経諸本およびその系統に属する諸本では、4巻本構成であるのに対して、開宝蔵を受けた系統（高麗蔵初雕本および再雕本、金蔵）および日本に伝存する古写一切経などでは3巻本構成であり、巻数構成からみても系統が大きく分かれる。

ここでは、これまで調査の報告が限られている普寧寺蔵に注目してみたい。本稿で扱う普寧寺蔵および思溪蔵は、ともに増上寺に所蔵されるものである。これら貴重な版本大蔵経を閲覧・調査することができたのは、浄土宗総合研究所の柴田泰山師にお力添えいただき、大本山増上寺より調査の許可をいただくことができたためである。ここに記して衷心より感謝申し上げる。

普寧寺蔵は、南宋が滅んだ翌年、1277年に杭州の普寧寺にて開板されたとされる。南宋滅亡時の混乱によって、湖州で制作・印行されていた思溪蔵の版木が失われたのを受けて制作されたと考えられる。そこで問題になるのが、思溪蔵と普寧寺蔵、両蔵の具体的な関係についてである。すなわち、普寧寺蔵は版木が失われてしまった思溪蔵を（忠実に）覆刻しようとしたものであるのか、それとも、思溪蔵によりながらも何らかの編集の手が加わったものであるのか、という点は従来明確にされることはあまりなかったように思う。大正蔵の脚注に記された異読情報を見る限り、元版とも称される普寧寺蔵のみに見られる異読はかなり限られるものの、思溪蔵にはない異読が、普寧寺蔵および嘉興蔵（明版）に共有される用例もいくらか見られ、普寧寺蔵の段階で何らかの編集の手

は加わっていたことが予想される。

このたび、『普超三昧経』に関して、増上寺蔵の思溪蔵本と普寧寺蔵本を実際に画像を利用して比較したところ、本文の読みの違い（異読）も確認できたことに加えて、両者の関係を決定づけるものの一つとして、段落の切り方、改行箇所が異なっていたことが明らかになった。具体的には、思溪蔵に比べ、普寧寺蔵では段落・改行箇所がかなり増えており、しかも、その普寧寺蔵にみられるそれらの区切り方は、管見の限り、文脈上、おおむね適切と言えるものであった。これは、普寧寺蔵の開板に際して、思溪蔵とは別の写本大蔵経などを参照して、それらの段落・改行箇所に従ったものかもしれないが、両蔵の異読の違いが限定的であることを考慮に入れば、普寧寺蔵を開板する際に、実際に経文を読解し、適切な箇所に改行を入れるような「積極的な編集」がなされたことと見ておく方が妥当であろう。すなわち、筆者が調査しえた『普超三昧経』に限り、という制約はつくものの、普寧寺蔵は思溪蔵を忠実に覆刻しようとしたものではなく、比較的積極的な編集がなされたものと見ることができる。普寧寺蔵の制作には、普寧寺を本山とする新興仏教教団の白雲宗^{びやくうんしゅう}がかかわっていたと考えられ、ひょっとすると、その影響があったのかもしれない。

段落・改行箇所の違いというのは、確かに本文の読みには影響を及ぼさず、大正蔵にみるように、注記しないことを通例とするが、版本大蔵経の系譜を見ていく上ではかなり重要な要素である。すなわち、版本大蔵経を比較して段落や改行箇所が異なる場合、片方がもう片方を（単に）覆刻したものではない可能性が高くなるし、さらに、普寧寺蔵本の『普超三昧経』のように、先行する版本大蔵経よりも新たな段落・改行箇所が数多くみられる場合には、積極的な編集がなされたということになる。

ちなみに、南宋代に雕造されたものと元代以降に雕造されたものからなる磧砂蔵本の『普超三昧経』では、普寧寺蔵本とは段落・改行箇所が共有されており、同経については、磧砂蔵本は普寧寺蔵本に基づいて雕造されたことがわかる。さらに、洪武南蔵でも、普寧寺蔵および磧砂蔵と段落・改行箇所が共有される。一方、永楽北蔵では、偈文や品（章）の冒頭および末尾の箇所などを除き、原則的に段落・改行箇所は削除されてしまい、それは民間で開板された嘉興蔵にも受け継がれた。『普超三昧経』に関する思溪蔵以下の江南諸蔵の系譜

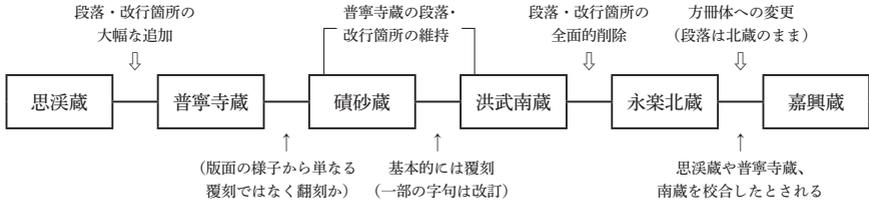


図6 『普超三昧經』に関する江南諸蔵（思溪蔵以降）の相互関係

について、段落・改行箇所に注目して図示すると次のようになる【図6】。

ともかく、ここで強調しておきたいのは、版本大蔵經の相互関係を探る上でポイントの一つとなる、段落・改行箇所の異同を調査するためには、大蔵經各資料の画像を実際に確認・調査することが肝要であるという点である。

一方で、そのような諸本資料の段落・改行箇所の異同については、これまでに刊行されてきた書籍などでは注記されることは原則なされず、実際、大正蔵でも注記されていない。けれども、そのような段落や改行箇所の情報を残すことは、上述の通り、版本大蔵經の相互関係、系譜を探る上で一定の有用性を持つので、それについてわずかばかりの提言をしておきたい。

その手立ての一つとして、デジタルテキストにおけるマークアップを利用して、そのような情報を残していくことが有効と考える。すなわち、TEI (Text Encoding Initiative) のようなガイドラインに準拠するなどして、大蔵經諸本、特に版本大蔵經の段落・改行箇所についてデジタルテキストにマークアップするかたちでそれらの情報を残しておくことができれば、諸本資料の相互関係を実証的に検討する手がかりになりうる。もちろん、これから発行されるような刊行本でも、そうした事柄についても注記するようにすればいいのかもしれないが、現時点では、段落・改行箇所の相違を注記することは、通常の印刷媒体においてはなされないことが通例であり、また、もし印刷媒体で注記した場合には相当に煩雑なことになりうる。そうした中で、研究上有用となる可能性がある情報を極力多く残していくには、デジタルテキストにおけるマークアップを活用するのが現実的で、有効な方策の一つと思われる。これまではさまざまな制約ゆえに、従来の印刷媒体では記されずに、(やむを得ず)捨てられてきたような情報や新たに研究に有効であることが明らかになったような情報を残

していくには、デジタルテキストにおけるマークアップを用いるのが有効な手立てのひとつになるであろう。特に、国際標準化ガイドラインとして策定された TEI は、そうした情報を残して共有していくことも視野に入れて策定されているので、それを利用することは有用であろう。

4. まとめにかえて

以上、チベット語大蔵経および漢語大蔵経について、それらの研究に用いる諸本資料の現存状況や利用状況、および、デジタルあるいはインターネット上で利用可能なものについて概観してきた。

すでに幾度か述べたように、大蔵経をめぐる研究状況は、近年のデジタル技術の発達・発展もあって、現在、大きな変革期に差し掛かっているように筆者は感じている。大蔵経のような、膨大な分量の叢書類は、従来の印刷という形態では、公刊することはもちろん、保管や管理、運用の面でも容易ならざる面が多々あったが、デジタルのかたちであれば、印刷形態に比べて、刊行および利用の面での利点がかかなり大きい。今後は、デジタル技術の発展の恩恵を受けながら、利用可能になる大蔵経資料も増え、それらによって大蔵経に関する研究も大きく様変わりしていく可能性が高い。

なお、本稿は、大蔵経諸本の現存資料の紹介に重点を置いた記述になっており、大蔵経の歴史や移り変わり、伝承などについては体系的な記述になっていない。より体系的に大蔵経の歴史や伝承、背景などについて知りたい、あるいは、大蔵経全般についてより広く興味がある読者には、近刊の拙著『大蔵経の歴史——成り立ちと伝承』（方丈堂出版、2019年12月刊行予定）を手にとっていただければ幸いに思う。

注

- 1 船山徹『仏典はどう漢訳されたのか——ストラが経典になるとき』（岩波書店、2012年）pp. 11-12 参照。
- 2 Helmut Eimer, *Ein Jahrzehnt Studien zur Überlieferung des tibetischen Kanjur*, (Arbeitskreis für Tibetische und Buddhistische Studien, Universität Wien, 1992) など。Eimer 博士の業績で、日本語に翻訳されたものとしては、川崎信定「チベット大蔵経諸版成立史研

究序説（資料翻訳編）」（『東洋学論叢』〔印度哲学科篇〕26、2001年、pp. 71-95）収録の「チベットカンジュルの歴史についての覚え書き」がある。

- 3 Shayne Clark, “Lost in Tibet, Found in Bhutan: The Unique Nature of the Mūlasarvāstivādin Law Code for Nuns,” *Buddhism, Law & Society* Vol. 2, 2019.
- 4 Paul Harrison 先生との個人的な研究相談の中での助言による。実際、筆者は『阿闍世王経』という大乘経典について、16種ほどのカンギュル資料を用いて校合作業を行ってきたが、数十葉にも及ぶ資料全体を校合するのは容易ではなく、新たな資料を用いての校合作業は躊躇してしまうのが正直なところである。ところが、新出のカンギュル資料が重要なものであるかどうかは、実際に調査してみないとわからず、試みに数葉から十数葉程度、もしくは、典型的な異読がみられる箇所について調査することで、新たに出てきた資料がこういった性質のものかを見極めた上で、全体の校合作業に用いるかどうかを見極めるのは有効である。
- 5 野沢佳美「江戸時代における明版嘉興蔵の輸入状況について」（『立正史学』119、2016年、pp. 77-99）
- 6 梶浦晋「日本現存の宋元版『大般若経』——剛中玄柔将来本と西大寺蔵磧砂版を中心に」（『金沢文庫研究』297、1996年、pp. 1-19）

主要参考文献

大塚紀弘『日宋貿易と仏教文化』（吉川弘文館、2017年）

梶浦晋「日本現存宋金元版仏典リスト（暫定版）」（『東アジア出版文化の研究——学問領域として書誌・出版研究を確立するために』、2003年、本冊4、pp. 445-495）

野沢佳美『印刷漢文大蔵経の歴史—中国・高麗篇』（立正大学情報メディアセンター（品川図書館）、2015年）

船山徹『仏典はどう漢訳されたのか——ストラが経典になるとき』（岩波書店、2012年）

そのほか、日本に現存する一切経・大蔵経に関する目録および調査報告書類など多数